



政治経済学部  
「シーナカリンウィロート大学  
短期留学プログラム」参加者の声(1)  
山宮夏穂 / 長谷川愛 / 津田鈴夏

中央左から政治経済学部武田教授、バンコク・ポスト紙 Pichai Chuensukusawadi 編集主幹

### 山宮夏穂（経済学科1年）

私はこのプログラムで中央銀行や国会の視察から象乗りや王宮・寺院の観光まで様々な経験をしました。その中で1番印象に残ったのは、共に過ごしたタイの学生達です。授業や視察の時だけでなく、休日には私達を誘って多くの場所に連れて行ってってくれました。彼らはとても積極的で、日本について知りたいという熱意、また、授業でのディスカッションの際には、その知識の多さに驚きました。そして「微笑みの国」という名の通り、笑顔がいつも絶えず、一緒に過ごしてとても楽しかったです。

彼らと過ごすことで私自身、良い影響を受けることができました。勉強面はもちろんのこと、それ以外の面でも、私にとってとても充実した1か月間でした。

### 長谷川愛（地域行政学科1年）

今回初めてタイの短期プログラムに参加させてもらい、毎日非常に中身の濃い体験ばかりを経験させていただきました。その中でもチェンマイでの4日間は特に印象に残っています。現地では山岳地帯出身のエイズ孤児の子供たちを預かっている施設を訪問し、私はそこでエイズの感染者がまだまだ増加していること、山岳民族の差別があることなどを教えていただきました。施設の子供たちはこんなにも笑顔なのに、将来この子供たちが就職するときだけでなくいろんな場面で差別を受ける可能性があることを考えると、どうしても納得のいかない気持ちになりました。

タイだけでなく世界中で起きている差別問題はどうか解決できるのか、この短期プログラムをきっかけに大学4年間で自分なりの答えを模索していこうと思います。

### 津田鈴夏（政治学科1年）

タイ留学を通して最も印象に残ったことは、タイ学生たちとのディスカッション授業だった。彼らにとって社会で起こっていることに関して興味を持ち、それぞれの意見を話し合うことは当然のようだった。同年代の子から「アベノミクスについてどう思いますか？」と最初聞かれたときは戸惑ってしまったが、プログラムを終えて今、その質問にすぐに答えられなかった自分が恥ずかしくなる。政治経済はもちろん、さまざまな社会問題に対して積極的に目を向けなければいけないと思った。